



ウッド・チェンジ 対談

東京海上日動火災保険(株) × (株)モリアゲ



▲ 新・本店ビル (イメージ)

10月は「木材利用促進月間」です。林野庁は、中央・地方の関係機関や、企業等と一体となって、「木づかい運動」を推進するイベントや情報発信などの取組を展開します。昨今、民間の事務所・店舗や高層ビルの木造化・木質化の事例も少しずつみられるようになってきています。そのような状況も踏まえつつ、本特集では、木材利用促進月間に際し、今を時めく「木を愛する」お二方に対談いただきました。木材をふんだんに使った本店ビルの建替えを8月に発表された東京海上日動火災保険株式会社。建替えプロジェクトを担われているコーポレート運用部専門部長の藤本一郎さんに、本建替えの狙いやご苦労について本音のお話を伺いました。お話を深掘りいただいたのは、この6月に農林水産省を退職し、8月に株式会社モリアゲを設立された長野麻子さん。長野さんは、2年前まで林野庁木材利用課長を務められ、木や森を愛するがゆえに起業された慈愛と行動力に満ちたスペシャリストです。

【藤本一郎さん プロフィール】

- ・昭和62年
東京海上火災保険
(現東京海上日動火災保険) 入社
- ・平成29年
資産運用第三部長
(現コーポレート運用部長) に就任
かねてから抱いていた本店建替え構
想を本格的に始動
- ・令和3年4月 同部専門部長として本プロジェクトに専念
とにかく「木が大好き」と語る。ご自宅にも木があふれていらっ
しゃるとか。木材をふんだんに使った本店ビルの建替えという
長年の悲願を現実のものとするべく日々奮闘中。



【長野麻子さん プロフィール】

- ・平成6年
農林水産省採用
- ・平成30年
林野庁木材利用課長に就任
- ・令和4年6月
農林水産省を退職
同年8月 株式会社モリアゲを設立
「森や木への愛が止まらない」と語る。
故郷である愛知県安城市は、水源地の長野県根羽村の森林を保
全している。
「水を使う人は森を育てる」といった関係が当たり前になり、森を
想う人が増えることが理想。人と森をつなぎ、各地の森をモリア
ゲます。





長野 新たな本店ビルは高さ100メートルですが、今のビルは何メートルですか。

藤本 100メートルです。もともともう30メートルくらい高い計画で、建築基準法上も適法でしたが、皇居など周囲との景観をめぐる、いわゆる「美観論争」の影響を受けて100メートルとなった経緯があります。

長野 では、今回も同じ高さで建てるということですね。

藤本 そうですね。10年以上前に構想したときは、周囲を見渡すと100メートルを超えるビルが立ち並んでおりましたので、周囲に負けない高さのビルにしたいと思っていました。でも徐々に考えが変わり、高さを目指すのではなく、あえて低くて広いメガプレートの中で、皆が一緒

にコミュニケーションがとれて、どこにいても皇居の緑が見えて、沢山の木をつかい、自然光をたくさん取り入れた明るくて健康的な建物が良いと思うようになり、現在のプランに行きつきました。

長野 木造化は、お施主さんが「木を使ったビルにしたい」という強い思いがないと実現しないんです。藤本さんがこの強い思いに至ったその背景や、構想した10年前からの経緯は、どういったものでしょうか。会長が木材利用を進めていたからですか？

藤本 私自身、木が大好きで、個人の住宅であれオフィスであれ、木と緑と自然光が満ち溢れた空間が素晴らしいと考えてきました。建替えについて具体的な検討に着手した5年前の時点では技術的な制約も大きく、どの程度木を使えるかは全く未知数でしたが、その後、建替えのコンセプトやプランにつき弊社経営陣に諮りながら検討を進めていく中で、国産材を大量に使用することにより我が国の森林資源を循環利用し、林業の活性化と地方における若者の仕事の創出、地方創生のお役に立ちたいという思いを強くしました。木材を用いた高層建築は日本においてはまだほとんどありませんが、国産木材を世界最大規模で用い

た木造ハイブリッド建築を東京、丸の内、真ん中に実現することができれば、きっと多くの皆さんがそれを見て後に続いてくれ、木造化の動きが加速し、林業の再生に繋がるのではないかと考えています。もちろん、今更申し上げるまでもありませんが、木材を大量に使用し再植林を進めることによってCO₂の吸収、排出抑制及び炭素の固定化といった、脱炭素社会の実現にも寄与します。正に一石三鳥、四鳥、五鳥にもなるプランだと。これは何が何でもやらねばと思ひ至りました。木材を使った建築技術が急速に進化したことも幸運でした。

長野 御社は保険の会社ですよ。環境については企業で配慮されることも多いと思いますが、地方創生は、保険とどういったつながりがあるんですか。

藤本 「地方創生」は重要なテーマと認識しております。私どもが扱う火災保険、自動車保険は、全国に沢山のお客様がいっぱいいますが、保険は人々の暮らしや経済活動に密接にかかわり、弊社は保険を通じてお客様に安心と安全をご提供しています。地方が元気になるといことは地方の暮らしや経済活動が活気に満ちるといことで、結果的に弊社



▲新・本店ビル (イメージ)

がお役に立つ機会も増えてまいりませう。日本が元気であるためにはまず、地方が元気であっていただきたい、そのためにお役に立ちたいと考えております。

長野 なるほど、地方は面積的にも多いですよ。日本の7割が森です。今回、カーボンニュートラルを目指す時代に建替え時が来て、本場にチャレンジングな決定をされたわけですが、これを実現することで御社として期待している効果やポイントなどを教えてください。

藤本 それはやはり、脱炭素社会の実現をはじめとする様々な社会的課題に取り組む弊社の企業姿勢を目に見える形で示すことができることだ

と思います。国産の木材をふんだんに使い、屋上全面を緑の森にし、最高レベルの環境性能を備えた本店ビルを建てることは、カーボンニュートラルやSDGsの観点からも、大変分かりやすいメッセージになると思います。

長野 社内は、スムーズに稟議が通りましたか。コストがかかるのではとか、燃えるんじゃないかとか、地震は大丈夫かとかですね、よく聞かれることのようにですね。

藤本 社内でも社外でも、木で強度は大丈夫か、火災保険会社の本店が燃えてしまったら問題ではないかという意見をよくいただきます。私もは保険会社であり、首都圏直下地震等の大規模災害が発生した際も断に事業を継続し、お客様に速やかに保険金をお支払いすることが社会



的使命と心得ています。したがって地震・火災・水害等への災害対応力には特に注力しており、最高レベルの強靭性を備えております。耐震性にしても耐火性にしても求めるレベルをどの素材を用いて達成するかの違いであって、木だから弱いということはありません。また、地球環境問題も地方創生も元々私どもが社としてずっと標榜してきたことで、このビルのコンセプトと合致しておりますので、社内的にはごく自然に受け入れられていると思います。

長野 支店の方などからうらやましがられないですか。

藤本 これまで支店についても内装等に木を用いたり、地域ならではのアイデアを取り入れたりして整備してきています。研修施設にも木材を多用しました。

長野 研修施設は私も見せてもらいました。都心で、入った途端に木の香りがして、とても集中できる環境だと思っただけですけど、運用されてどうですか。研修の効果で、保険の売り上げが上がってきたとか、何かビジネスへの効果のエビデンスはありますか。

藤本 評判はよいです。ですが、あまりビジネスに結びつけて考えてはおりません。よいこと、正しいこと

を続けていけば、弊社が世の中から支持されて、結果的に弊社の商品を選んできただけではないかという考えです。

長野 8月1日にプレスリリースされましたけど、社外の反応はどうですか。

藤本 お陰様でポジティブな反応がほとんどでした。と同時に、100メートルの高層建築を木造ハイブリッドで建てるというのは、ほぼ前人未踏の領域なので是非頑張ってください、本当にやり切れるのかとか、木で作るのはよいが劣化しないのかといった、心配と期待が入り混じった声もいただきました。

長野 法隆寺はメンテナンスしているので、1300年もつてますけど、これは今後何年ぐらいもたせる予定ですか。

藤本 少なくとも100年は絶対使います。

長野 すごいですね。森林は50年、100年の計で作るので、人の時間と森の時間が合っているといます。木材はどこから調達するかなど具体的に決まっていますか。

藤本 量が必要ですので、しっかり安定的に調達するのが課題です。

長野 木材の調達は、乾燥などに時間が結構かかるんです。設計ができ

た段階で、どんな木、どんな部材があるかを山側に伝え、時間的に余裕をもらえると山側も仕事しやすいです。公共施設だと分離発注という自治体さんが先に木を購入して建築側に提供して、建築費から資材費を引くようなことをします。適材適所を外材も使われますか。

藤本 いえ、基本的に全て国産材です。大変です。

長野 全て国産材とは、それは素晴らしいことですね。ところで、設計のレンゾ・ピアノさんはコンペで選ばれたんですか。

藤本 素晴らしい実績をお持ちの方、私ももと対話していただけているという二つの軸で世界中で60名くらいの建築家の方をリストアップし、その筆頭がレンゾさんでした。コンペではなく、私どもが直接お訪ねし、



TOKIO MARINE CAREER DEVELOPMENT CENTER (東京海上日動火災保険研修センター) ウッドデザイン賞 2019 受賞

計画をご説明して設計を依頼しました。引き受けてくださるか不安でしたが幸いに二つ返事でご了解いただくことができました。

長野 ここ最近、直面している課題のようなものはありますか。

藤本 すべてが新しい挑戦なので、毎日ピンチの連続です。例えば、CLTを床に使うとします。コンクリートスラブの代わりにCLTを使うと、強度を確保するために分厚くなりませんが、耐火性能確保のために耐火被覆をすると、更に厚く重なりCO₂排出量も増えます。木は本来、軽くてCO₂を排出しないのがメリットなのに、コンクリートで作った場合に比べて、より厚く、より重く、値段は高く、CO₂排出量はさほど変わらないという現実と直面したのです。しかもせっかくだ使用した木は耐火被覆されて見えない。これではよいことは何もありません。私どもの取組を見て「よいね」と、ほかのお施主さんなどが思ってください。日本中に広げるためには、合理性が必要です。やはり木は木としての「よさ」を軽く美しくしてCO₂排出は小さいという特徴を生かした使われ方ができないと普及させることは難しいと思います。ここが一番苦しいところです。現行の規制の下

で木の良さを生かしながら最大限木を使える方法を模索しています。

長野 そういった課題があっても、絶対に解決して実現するのは、失礼ですけれど知恵を出す実験のような場になりますね。

藤本 そのとおり、これは壮大な実験です。私もいろいろなものが苦しみながら「ここまでやれた」というのを、しっかりと皆さんに見ていただいて、もしかしたらその過程で、私どもの施工には間に合わなくても、いろいろな新しい技術や製品ができたとか、諸規制が合理化されたといった形で後に繋がればよいと思っています。

長野 そういった課題を発信してもええと、全然違う人が、解決策を示してくれることもあるかもしれませんね。これだけ名だたるゼネコンの皆さんも入っているから、みんなで技や知恵を出してくれるでしょう。このチャレンジングなプロジェクトは、社内では何人ぐらいで取り組んでおられますか。

藤本 5人です。

長野 すごい。「神ファイブ」ですね。あとはいろんな方と協働してるのですね。

藤本 設計会社、施工会社、テクニカルアドバイザーなど世界中のスペシャリストの皆さんに支えられなが

ら、取り組んでいます。

長野 国内にとどまらない「地球規模的プロジェクト」ですね。

藤本 レンゾさんも、日本や日本の文化に敬意を感じて下さり、このプロジェクトを本当に楽しんでくれています。当初は、これほど木を使っている話ではなかったのですが、木は日本人にとっては単なる素材以上の特別なものであるということ、歴史的なところも含めてご説明したところ大変共感いただき、だったら全部木でやるうという話に盛り上がって、今があるんです。

長野 日本は、森に囲まれているから、その恵みの木を適材適所で使いながら生活をしてきましたが、一旦森や木と離れてしまった。今、環境の世紀という中で、もっとウッド・チェンジしていきましようということですね。レンゾさんにもウッド・チェンジを固有名詞として使っていただけると、世界に広がりますね。そして、レンゾさんからも苦労したことや大事にしたことなどを海外の目から発信してほしいですね。グローバルイノベーションで何かと均質化していく中で、日本の個性や風土に培われた「木の国」の文化を突き詰められた方がよく、そういった中でこの木の本店はシンボルとなりますね。

あとLEED^{※2}認証も予備認証。プラチナを取られますが、大変ですか。

藤本 大変です。

長野 計画段階でも、相当厳し目にはやらないといけないと聞きます。予備認証だから、いつか本認証になるんですか。

藤本 予備認証と本認証は別物です。今は、基本設計をベースに、予備認証を取りましたが、本認証は、完成した後に審査を受けてから、ということになります。したがって、本認証でもプラチナが取れるとは限らないというリスクがあるんです。しかし、不転の決意です。

長野 この予備認証をとったことを、プレスリリースしたというところ、不転の覚悟がうかがえます。

藤本 はい、必ず取るという覚悟です。グローバルな環境認証であるLEEDは、例えば水資源の再利用、オフィスの明るさ、ウェルビーイングなど、審査項目が多岐にわたります。例えば、もともとLEED目的でそうしたわけではないのですが、この建物の屋上は全面緑化にしています。よくあるビルの屋上のように空調の機械がバツと並んでいるのが嫌でしたので、社員が寛ぎ、瞑想にふけることもできるような森にしようと考えました。結果的にこうい

った点はLEDでも、評価されています。

長野 ちょっとした緑化ではないですね。森にするには土が要って、それが結構重いんですね。水も要りますし。それを木で支えるというのは、チャレンジですね。

藤本 100メートルの建物は重くて、もしこれを支える構造を全部木でやろうとすると、1階部分の大きい空間を全て木の柱で埋め尽くさないと支えられないぐらいの荷重なんです。また外部に露出する部分は湿度でたわみやひずみが生じやすくなります。そこで低層部の柱は鉄骨にしたり、上層階は木柱と金属のブレース（筋交い）を併用したりして、木の良さと鉄骨等の良さを両立させたハイブリッド構造にしたのです。

長野 適材適所はとても大事なことで、原理主義に陥ると苦しくなるから、やっぱり柔軟に、その時の技術でできるものでよいと思います。地上20階ですものね。今日は、すごい強い意志と覚悟をお聞きしましたが、他のお施主さんたちに、これをお勧めするとしたら、何が一番ポイントですか。

藤本 やはり工法とか部材について、もう少し汎用化されるといいですね。私どもがやってるような、試

行錯誤は相当のエネルギーが必要で、毎回個別に各企業さんがそれに挑戦するのは大変だと思いますので。今は黎明期なので、いろんな企業さんがいろんなチャレンジをされて、その中でスタンダードができていくのだからと思うのですが、それを一刻も早く作って普及させるのが一番重要だと思います。

長野 そうですね。隅さんが会長のウッド・チェンジ協議会や、日本ウッドデザイン協会のように木で社会課題を解決しようという団体もできているので、共創できるいいですね。それから、これだけの木を使うとなると、全国から取り寄せると思うんですけど、今後、木を植えに行くようなことも予定されていますか。

藤本 会社には何も諮っておりませんのであくまでも個人的な意見ですが、使うだけじゃなくて、その後しっかりと植える。社員や代理店さん、お客様と一緒にボランティアで全国で植林活動というのをぜひやりたいです。

長野 そうですね。木を使ったら植える、水を使う人は木を植える、やっぱりそういう繋がりを都心のビルでもつくるのができれば、山側からするとすごくありがたいです。今の材価だと再造林をして次に育林を

する分のお金が出にくく、再造林率も低いというのが課題です。植えることへのお手伝いでカバーしていくような流れが大事ですね。御社にも是非そうしていただければと思います。そして植えた木を次のメンテナンスの時や、100年後かその先の建て替えの時に使われるとか。木は、人間の生きる時間をさらに超えて生きるので、どう世代でつないでいくかが大きな課題で、人間社会が自然の流れの一部となるのが大事だと思います。使ったら、ちゃんと植えることが習慣化するととてもいいですね。昔から、神社や学校は建替えのための森を持っていたんですけど、将来の野望として、本店の建替えのための森をお持ちになるという考えはございませんか。

藤本 今のところはないです。

長野 いつか、そのようなご用命がございましたら私、全力でよい森を探しまして、その森を社有林としてお持ちいただいて、よい管理者も探して、材をお買い上げいただくようなことをサービスとしてやっていきたいと思っています。宣伝でした（笑）。藤本さん、建つまでずっと担当してくださいね。

藤本 あと6年ですから建つまでは無理でしょうね。しっかり後輩に託

し、離れたところから見守っていきたいと思います。

長野 本当に街の風景が変わると思いますので、期待しています。着工が24年の12月からとのこと、ぜひ見に行きたいです。



※1 東京海上日動火災保険株式会社の隣相談役は、ウッド・チェンジ協議会の会長。同協議会は、民間建築物等における木材利用に当たっての課題解決方法の検討、木材利用の先進的な取組等の発信など、木材が利用しやすい環境づくりに取り組むため、林野庁が令和3年に発足。

ウッド・チェンジ協議会（林野庁ウェブページ）
<https://www.myn.natf.go.jp/j/nyou/kidukai/wckyougikai.html>



※2 非営利団体 USGC* が開発、運用し、GBCI** が認証の審査を行っている、建築や都市の環境性能評価システム。コストや資源の削減を進めながら、人々の健康によい影響を与え、再生可能なグリーンエネルギーを促進する建築物を認証*。

USGC*: U.S. Green Building Council.
GBCI**: Green Business Certification Inc.

新・本店ビル（イメージ）の写真提供：東京海上日動火災保険㈱